



石井 実 (監修)

『日本の昆虫の衰亡と保護 (環境Eco選書)』

北隆館

2010年9月30日初版発行 325 pp.

われわれ虫屋ほど自然環境の変化に敏感な人種は少ないだろう。言うまでもなくそれは昆虫自体の環境の変化に対する敏感さに呼応している。近年の環境の変化とそれに伴う昆虫の衰亡は、多くの虫屋にとって目を覆うばかりのものに違いない。監修者の石井氏が最初に述べているように、日本の生物多様性は「劣化」の一途を辿っている。本書では20余名の昆虫研究者が各専門分野の現状について報告し、さまざまな解決策の提案を行っている。稀少種の生息の動向やその保全については、すでに数多の報告があるが、昆虫全般について本書ほどまとまったものはこれまでになかった。全体的に具体的かつ平易に解説されており、最新の知見のみならず、さまざまな昆虫の将来的な保全の指針ともなる内容を含んでいる。甲虫に関するものを挙げると、カブトムシ、クワガタムシ、水生種全般、ゴミムシ、ゲンゴロウ、糞虫、

外来生物、小笠原の問題などの事例が紹介されている。本書を読み進めて感じるのは、昆虫の衰亡をとりまく諸問題のあまりの根深さ、幅広さである。昔からある開発に伴う環境そのものの消失や汚染といった問題に加え、近年では、外来種問題、関連してペットとして輸入される甲虫とそれに付随する多くの問題、さらには温暖化の問題もある。また、虫屋に直接関係することとして、一部のゲンゴロウやクワガタ類などに対する採集圧の問題もある。外来種や温暖化の問題については、徒に楽観論を煽るような著作もあるが、本書を一読すれば、それらがいかに重大な誤りであるかはもちろん、現状を憂い、真摯に保全に取り組む人々への軽薄な愚弄であることもわかる。世の中に明るい話題が少なくなっているが、残念なことに、楽しい(だけであるべき)はずの昆虫採集にも牧歌的な時代は過ぎ去り、きわめて面白くない、同時に非常に深刻な問題にわれわれも向き合わなければならない時勢はますます強まっている。本書はこのような時代に昆虫採集を行う虫屋がぜひ目を通しておきたい一冊である。

(九州大学総合研究博物館 丸山宗利)

【短報】モンスズメバチ巢より得られたナミクシヒゲハネカクシの記録

ナミクシヒゲハネカクシ *Velleius dilatatus* (Fabricius, 1787) は、各種スズメバチ巢下に堆積した排泄物残渣を食べる掃除者として知られている(松浦 1995)。国内においては、オオスズメバチ *Vespa mandarinia* Smith, 1852 の巢から見つかることが多いが(岩田 2010)、ヨーロッパでは、モンスズメバチ *V. crabro* Linnaeus, 1758 の巢から本種の得られる例が多く知られている(Strassen 1957; Spradbery 1973)。国内において、本種がモンスズメバチ巢からの発見されるのは稀であり(松浦 1995)、データを伴った形で報告された例は少ないと思われる。

筆者らは、本種成虫をモンスズメバチの巢中より得たため、記録を公表して採集時の状況について報告したい。なお、本種の同定は Watanabe (1990) に従った。末筆ながら、文献の入手に際してご助力いただいた蓑島悠介氏(北海道大学大学院昆虫体系学研究室)に御礼申し上げる。

記録

ナミクシヒゲハネカクシ *Velleius dilatatus* (Fabricius, 1787) (図1)

2♀, 新潟県長岡市鉢伏町, 24-IX-2010, 深田純採集・岩田泰幸保管。

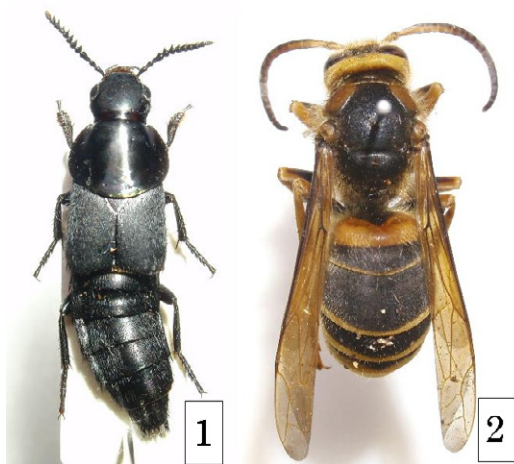


図1. モンスズメバチの巢から得られたナミクシヒゲハネカクシ。

図2. モンスズメバチ (♀)。